発行日：令和8年11月　発行元：渋谷区土木部道路課

オオヤマカイドーニュース

#大山街道の歴史・未来

vol.11

オオヤマカイドーニュースとは？
大山街道（宮益坂・道玄坂）の整備に関わる耳より情報を発信します！

オオヤマカイドーニュースvol.11では、宮益坂・道玄坂のケヤキ並木に注目します！木陰をつくり、心地よい歩行環境を支えてきた並木を、次世代へ引き継いでいくには、どのような工夫が必要なのでしょうか。今回は、樹木の専門家である濱野周泰先生に、**現在のケヤキの生育状況や、地上からは見えない根の環境づくり、並木の風景を守り育てるための考え方**についてお話を伺いました。

宮益坂・道玄坂を支えるケヤキ並木の未来に向けて



GUEST SPEAKER に聞く　大山街道（宮益坂・道玄坂）にまつわる想い出はありますか？



濱野周泰さん
（NPO花と緑のまち三鷹創造協会理事長／元東京農業大学教授）

もう50年ほど前、私が大学の助手になったころ、宮益坂から１本入ったところに、ジャズを演奏してくれる品のいいクラブがあって、10年ぐらい通っていました。今はもうお店も無くなってしまいましたけどね。

私たちが20,30代のころの渋谷は、若者が憧れる場所で、それを受け入れてくれるお店や文化があったんです。当時の老舗が無くなってきていますけど、やはり、ある程度のステータスを持ったお店があって、それが次の世代を引き込めるような、そういう街になるといいなと思っています。

現在の宮益坂・道玄坂のケヤキの生育状況をどのようにご覧になりますか？

ケヤキが植えられた当時から、街路を取り巻く環境も大きく変わっているなかで、よくここまで維持してきたなという印象があります。

本来、ケヤキは非常に大きくなる木で、周りに支障がないと、丸い樹形になるのです。例えば、昭和記念公園のみんなの原っぱにあるケヤキが典型的です。

ところが、周りに木や建物があると、日光を求めて、上に上に細く伸びていく。街路樹として植えられたケヤキは、その限られた空間に合わせて、枝先が短く詰められている場合も多いのですが、**宮益坂・道玄坂では、枝先がちゃんと残っていて、ケヤキらしい樹形**を保っています。都市特有の環境がつくった、この空間の特徴を表した姿と言えるでしょう。根系が制約されていることもあり、葉は若干小さめですが、この環境であればよく育っていると思います。


街路樹として良好な樹形を保つ宮益坂のケヤキ

宮益坂・道玄坂のような都心の街路環境はケヤキの生育にどのように作用しているのでしょうか？

人が安全に歩行するために、歩道は必ず舗装するものです。これまでは歩道上の小さな植樹ますにケヤキ等の高木を植えていましたが、それでは根が伸びません。**人の歩行とケヤキの生育環境には、どうしても相いれない部分がある**のです。

根元を歩行者に踏まれないように保護蓋を設置すると、根に水が届かず、空気が入らない環境になってしまうことがあります。ですから、人の歩行とケヤキの生育環境を共存させるための工夫が求められます。例えば歩道の下の土を柔らかくすることで根が入りやすくするなど、**舗装の影響が地中に及ばないように配慮することが重要**になります。

宮益坂坂中の整備で施工されたように、下地としてデッキをつくり、その上に舗装を仕上げる方法は、ケヤキの生育環境の保護にはとてもよいと思います。舗装が持っている利便性を損なわずに、根が生育できる環境を共存させれば、ケヤキと人、両者win-winの関係になるでしょう。


地中で根が育ちやすい空間を確保するため根元周辺には踏圧保護版を設置


根元周りは透水性の高い舗装を採用

現在の宮益坂・道玄坂の歩行環境に対してケヤキ並木はどのような貢献をしてきたのでしょうか？

まずは木陰です。環境形成の効果として、これが一番大きいと思います。当然、木陰ができれば、その下は直射日光を避けられます。木は、葉の気孔から水蒸気を出します。その**気化熱が、周囲の温度を下げてくれる**のです。

また、宮益坂は、整備によって歩道が広がり、ケヤキ並木の内側を歩けるようになりました。いわゆる**「みどりのトンネル」を歩いて通れる空間**が街の景観の一部になることで、文化度が向上するのではないでしょうか。例えば、歩道に２列ずつ並木が並ぶパリのシャンゼリゼ通りがいい例です。宮益坂・道玄坂の場合は１列ずつですが、ケヤキを身近に感じることができる体験につながる、貴重な空間です。歩道の拡幅による素晴らしい成果だと言えます。


歩道の拡幅によりケヤキ並木が形成する「みどりのトンネル」を歩行可能に

成熟したケヤキ並木を今後も健全に育てていくために重要なことは何でしょうか？

宮益坂の整備で実施されている通り、**根が生育できる空間を、なるべく広く確保すること**です。可能ならば、歩道の地中全体を、街路樹の根が生育できる空間にする。土中の通気と透水を確保するための整備を、都市部ではもっと実施してもいいと個人的には思います。

ケヤキは樹幹流のある「集水型」樹形だと言われています。枝先に落ちた雨が、細い枝から順に枝を通って、最後は幹を伝って、自分の根元に集まるのです。ケヤキをよく見てみると、幹が黒ずんでいたり、苔が生えていたりするところがあるように、水を好む木です。したがって、本来は都市の街路環境には向いていない面があるのですが、**樹形が端正で美しく、大きな木陰をつくれるのでよく使われる**わけです。植えた以上は、責任をもって**十分に水が根元まで集まる環境をつくる**ことが大事です。

それから、木の特徴を見極めたうえで**剪定することも重要**です。基本は「枝抜き剪定」と言われる方法で、枝が分岐するところで短い枝を残し、長く伸びている枝を抜いていきます。また必要に応じて、葉が残る部分で枝先を少し切り詰める。太い枝で切らずに済むように、枝抜きと適度な切り詰めで樹形をコントロールする。**理想的な形を意識しながら、適切な剪定を続ける**ことが求められます。

ケヤキ並木の風景を次世代に引き継いでいくにはどのような考え方が求められるでしょうか？

自然界では、ケヤキは200年、300年生きます。ただ、都市という特殊な環境にあると、その寿命は当然短くなるのです。また、同じ樹種でも、過酷な都市環境に耐性を持っているものもあれば、「こんなところは嫌だ」というものもあります。**同じ樹種のなかにも、個性、多様性がある**のです。ですから、枝抜きをしていても枯れ枝が多く出たり、樹形が傷んだりして、どうしても交代させなければならない木は出てきます。そこで大事なのは、**今ある樹形を保持できる樹種を選ぶこと**です。近年は、狭い空間で育ちやすい、樹冠の細いタイプのケヤキもありますが、それでは今の宮益坂・道玄坂のような品のあるケヤキ並木にはなりません。雄大な幹が上がって太い枝がある、このスケール感には向いていないのです。補植や代替をするときには、本来のケヤキを指定することを忘れないようにしてください。

それから、地域の方やお店の方に、**「こういう景色は他にはあまりない」ということを、積極的に発信**していただきたいですね。ケヤキについて、街の文化や歴史と関連づけて知っていただくことを目指せるといいと思います。特に商業活動が盛んなエリアなので、商業に関わる方や再開発の担当者にも、ケヤキ並木の成り立ちや背景を伝えてほしいです。根の環境を整えるような見えないところの工夫は、丁寧に説明したりアピールしたりしていかないと、なかなか伝わらないものです。



整備に合わせて植え替えた若いケヤキ。周囲のケヤキと合う樹形のものを選択

大山街道（宮益坂・道玄坂）整備事業について

渋谷区では、渋谷駅から東西に延びる大山街道（宮益坂・道玄坂）において、歩行者中心の道路空間の実現を目指しています。これまでに、車線数の縮小や路上駐車削減のための社会実験等を経て、現在の整備につながっています。これまでの取り組みについては、区ポータルにて情報発信を行っています。

詳細は
区ポータルへ

渋谷駅中心地区大規模再開発 について

渋谷駅中心地区は官民パートナーシップの下に、渋谷駅の機能更新と再編、駅前広場や道路などの公共施設の再編・拡充及び都市再生特別地区の指定を受けた大規模複合開発ビルを一体的に行うことにより、100年の一度の渋谷駅周辺の再生が進められています。渋谷駅中心地区工事・工程協議会（CM会議）では、段階的に整備される渋谷駅周辺の状況や工事情報の発信を行っています。

詳細は
CM会議HPへ

昨今の猛暑やゲリラ豪雨など都市を取り巻く環境も変化するなかで、渋谷区の街路樹やみどりにはどのような役割が求められるでしょうか？

気候変動への対応としては、やはり根系の空間を大きく確保することが一番です。人と街路樹は、階層を変えれば共存できます。宮益坂で実践されたように、地下に根の生活空間を確保して、そこに雨が入ればよいのです。**異常気象に対して街路樹が果たせる効果は大きい**と言えます。なお、近年注目されているレインガーデン[*1]は、昨今のゲリラ豪雨のような状況では、むしろそこに水が溜まってしまう可能性も考慮せねばなりません。公園や緑地の場合、工夫すれば設置も考えられますが、街路では、表面に貯めるより地下に確保した根の生活空間に雨が入るように設計するのをお勧めします。

また、樹種の構成は街路によって変えるのがよいと思います。水やり不要な乾燥に強い樹種や、ある程度の樹高で止まる樹種など、**街路の状況に応じてふさわしい樹種を見極めることが大事**です。例えば、住宅街などでは北アメリカ原産のハナミズキをよく見ますが、これはうどんこ病[*2]にかかりやすいです。日本には、日本の気候風土できちんと育つヤマボウシなどがあります。白い花が咲いて実がついて、四季の変化も感じられる木です。ただ、小さな植栽ますだと、ヤマボウシもアスファルトの輻射熱で傷むことがあるので注意が必要です。そのほか、イチョウも立派に育つ木ですし、場所によっては、乾燥に耐えて剪定も利くウバメガシもあります。やはり、場所ごとにふさわしい樹種を考えることが大事です。

*1 雨水を一時的に貯留し、ゆっくりと地中に浸透させるグリーンインフラ



（生成AIで作成）

*2 植物の病気のひとつ。葉や茎の表面にうどん粉のような白カビが発生する

渋谷区では、街路樹の管理更新計画を今年度策定予定です。適切に樹木の更新を行うために、どんなことが必要になりますか？

その土地の潜在能力や歴史を見て、**全体として街路樹がつづく景観を維持**すること。そのために、**一本一本の状況をよく観察することが重要**です。

木は人間よりずっと長生きなので、私たちは、木が倒れて森や緑地が更新されるところを見る機会はほとんどありません。ですから永遠だと思っているんですね。でも、**生命のあるものは、いつかは絶えます**。生物的な限界が来たときには、もう駄目になってしまうのです。

どうしても切らざるを得なくなったときには、木を自然の循環のなかに組み込むとよいでしょう。例えば、ある高さで切ったら、皮を剥いできれいにして、スツールとして活用するとか、太い枝はアート、工作の材料として供給するとか。堆肥にして土壌に還元することもできるかもしれません。

つまり、伐採してそのまま産業廃棄物にすることなく、**過酷な都市環境で生きてきた木にリスペクトを払い、伐採後の生かし方を考える**とよいと思います。

低木については、街路樹が持つ整然とした景観をまもるという視点から、積極的には推奨しません。少しでも管理が悪いと子どもの背丈ぐらいになって、交差点の際では車両交通の支障になります。もし緑量を求めるのであれば、テイカカズラなどのつる植物をフェンスに絡ませる方法もあります。植物の使い方は多種多様です。